

特別講演

「アッツ玉砕」に見る戦略思想

保阪 正康

はじめに

私は野にあって、主に昭和史の研究を続けている者だが、その研究姿勢は当事者の声をできるだけ多く聞き、実証的な検証を続けるという立場である。近代日本史のなかでも特に 1930 年代から 40 年代は、日本は<戦争>という政策を選択した。この選択には多くの誤りがあったことは事実である。その反面、日本人の発想法・文化的態度・歴史的姿勢が、この<戦争>のなかに凝縮しているのも事実である。

今回、このタイトルを選んだのは、次の三つの理由による。一つは、私は北海道の戦友会（合同）の支援者としてアッツ島、キスカ島の作戦について従軍した兵士から数多く話を聞いていること。第二に、北部軍司令官だった樋口季一郎の遺稿集にふれたこと。第三に、太平洋戦争の全プロセスのなかで、このアッツ島の戦いは特異な性格（玉砕では初めての作戦）を持っていること。このような関心から「アッツ玉砕」の背景に見える戦略的な考え方について検討を加えてみたい¹。

1 大本営のアリュेशन攻略作戦

アリュेशन作戦は、ミッドウェー島（ハワイの西方）占領を目的としたミッドウェー作戦と連動して練られた。この作戦について、大本営は昭和 17 年 5 月 5 日に命令を発し、「大本営ハ西部『アリュेशन』列島ノ攻略ヲ企図ス」とし、北海支隊長にアダック島やキスカ島、それにアッツ島の攻略を行うよう命じた。北海支隊は、このアリュेशन作戦用に編成された部隊であり、支隊長は旭川の歩兵第 26 連隊の大隊長だった穂積松年少佐であった。

大本営は北海支隊に作戦要領を伝えたが、その作戦目的はアリュेशन列島の要地を攻略して、「敵ノ機動並ニ航空進攻作戦ヲ困難ナラシムル」ところにあった。ミッドウェー作戦は失敗（空母 4 隻を失う）するが、6 月 7 日、8 日の両日に行われた作戦行動により、アッツ島もキスカ島も占領することに成功している。

アッツ島はアリュेशन列島の西端に位置し、東西約 56 キロ、南北約 24 キロの決して大きくはない島で、ほとんど人は住んでいないとされた。海岸の 95%は岩壁で平地

¹ アッツ島の戦いについては、保阪正康「アッツ島玉砕は必然だったか」同『太平洋戦争の失敗・10のポイント』（PHP 文庫、1999 年）も参照。

はツンドラの湿地帯が続き、歩行も困難とされた。気候は常に霧が深く、冬は風が強い。ある史料によれば人が立つこともできないという。つまり、この地は軍事的要塞として、対アメリカを意識する以外に戦略上の意味はない。なお、大本営がこのアリューシャン列島の確保を企図したのは、昭和 17 年 4 月 18 日のドーリットル隊の東京爆撃を見て、この地からのアメリカ軍の攻撃を恐れたからだとも言われている。アッツ島、キスカ島の占領は、ミッドウェー作戦の失敗を補うかのように大きく報じられた。なお、このとき、アッツ島に上陸したのは北海支隊の 1,200 人であった。アメリカの反撃は特段にはなく、この島には守備隊など全く存在していなかった。ときに偵察機が飛来して日本軍の上陸を確認するとどまっている。アメリカ側の史料である「モリソン戦史」によれば、マーシャル参謀総長は、「日本軍の西部アリューシャン占領は戦略的には比較的重要性はないが心理的には重大な不安を生んだ。しかしながら、当時中部、南、及び西南太平洋において情勢を維持するために、船、飛行機、及び訓練された部隊の極度の欠乏のため、キスカ、アッツの奪回のための早急な作戦は行わない」と決めたという²。

日本軍はアッツ島に航空基地を建設することにしたが、アッツ島には適当なところがなく、キスカに移動した。これが 9 月半ばのことだったが、しかし 1 カ月後にまたアッツ島の占領を行っている。キスカの西方アダック島にアメリカ軍の航空基地が完成しているとの報に接したからである。10 月 20 日の大陸命第 706 号に基づき発せられた大陸指第 1314 号には、「要塞歩兵隊ノ歩兵ハ歩兵隊長ノ指揮スル歩兵二中隊基幹ノ部隊トシ、特ニ対空火器ヲ成ルヘク多ク携行セシムルモノトス」とあった。アッツ、キスカの守備隊を北海守備隊とし、アッツは第二地区と称することになった。この地区隊長に任命されたのが山崎保代大佐であった。これが 10 月下旬のことである。

アッツ島が再び重要な戦略拠点となったのは、この時期にガダルカナルでの第 2 師団を増援しての総攻撃に失敗した折でもあり、アメリカ軍の反攻が北東方面においても予想されることになり、改めてキスカ、アッツにおける守備力を強固にすることにより、アメリカとソ連の軍事的提携を封殺することを目的としていたためであった。実際にこの方面へのアメリカ軍の動きも少しずつ激しくなっていた。

北海守備隊のアッツ守備隊は、独立歩兵 303 大隊や北千島要塞歩兵隊のほか高射砲、工兵、無線などの部隊で編成され、その守備隊員は 2,500 人となった。輸送が思うにまかせなかったが、この守備隊は必死に飛行場の建設にあたった。昭和 18 年 4 月中旬には戦闘機が可能な程度の滑走路ができあがった。昭和 18 年に入ってから、アメリカ軍はキスカから 130 キロ東にあるアムチトカ島の基地を完成し、そこを拠点にアッツやキスカ周辺の海域にいる日本の輸送船への爆撃を続けていたのである。実際に、アメリ

² 防衛庁防衛研修所戦史室『戦史叢書 北東方面陸軍作戦〈1〉－アッツの玉砕－』（朝雲新聞社、1968 年）124 頁。

カ軍の反攻はこのころになると態勢を整えていた。日本軍は制海権を喪失していたため、アツの守備隊長山崎大佐が辛うじて潜水艦でアツ島に入ったのは4月28日だったのである。

こうした経緯を見ると、アツ島守備の戦略的意味は二つであったことがわかる。ひとつは、全体の作戦のなかでミッドウェー作戦やガダルカナル作戦とのからみで練られたが、しかし実際には極めて曖昧な位置づけをされていたこと。そしてもうひとつは、アメリカとソ連の提携封殺という戦略的意図に具体的な確証がないのにその作戦を進めたことである。昭和18年4月までの日本の軍事の実態は、必ずしもアメリカ軍との間に大きな差はあったわけではないが、その戦略思想のなかに、方針の一貫しない大本営の体質が浮かび上がってくる。

2 北部軍司令官樋口季一郎少将の回顧

今、私の手元に、樋口が晩年に回顧した、『アツ、キスカ・軍司令官の回想録』（芙蓉書房、1971年）とは別の史料があるが、それをもとに樋口の考えを分析してみる必要がある。樋口が北部軍司令官として、札幌に赴任したのは昭和17年8月である。これより前に行われた、旭川師団歩兵第28連隊の約半数大隊をもって組織された北海支隊のアツ島攻略は、大本営直轄の下に行われた。北部軍は直接に関与しなかったという。樋口は赴任するなり、北海支隊派遣の目的を明確にするよう大本営に要求している。そのことは、アリューシャン列島確保の目的を明確にしてほしいという意味である。それによって結局、千島防衛も従来の防衛総司令官から樋口のもとに移ることになった。昭和18年2月北部軍を改編し北方軍に改め、樋口は北方軍司令官として作戦軍と内地軍との二重の性格を持つことになったが、内地軍の性格から、作戦軍へと切り替えを考えた。このことについて、樋口は部下に次のように訓示している³。

「北太平洋方面ニ於ケル我カ作戦ヲ遂行シ且北方作戦準備ヲ飛躍的ニ強化促進スル為北方軍司令部ヲ編成セラレ不肖季一郎乏シキヲ以テ軍司令官タルノ大命ヲ拝ス 寔ニ恐懼感激ニ堪ヘス 本日茲ニ北方軍司令部ノ編成完結ト同時ニ北部軍司令官ノ隷下指揮下ニアリシ各部隊ハ別命ナク予ノ隷下指揮下ニ入ラシメラレ又新タニ大命ニ依リ北海守備隊ヲ予ノ隷下ニ、第一飛行師団竝ニ北方船舶部隊ヲ予ノ指揮下ニ入ラシメラレタルハ寔ニ欣快ニ堪ヘサル所ナリ

抑々北方軍ニ負荷セラレタル任務ハ飽ク迄西部『アリューシャン』方面現下北海守備

³ 『戦史叢書 北東方面陸軍作戦〈1〉』240頁。

隊ノ確保シアル要域ヲ保持増強スルト共ニ敵米ノ反攻ヲ徹底的ニ撃碎シ且對蘇情勢ノ急變ニ対応スル作戰準備ヲ完整スル外 国土防衛等ニ関シ北部軍ノ任務ヲ繼承スルニ在リテ作戰軍タルノ性格ノ下ニ北方方面ノ作戰実施、作戰準備ヲ実施スル外 内地軍タルノ性格ノ下ニ従来北部軍ノ全任務ヲ遂行スルコトニ存ス 寔ニ任務重大、業務多岐ニシテ予ノ不敏不徳実ニ悚々トシテ只管力ノ及ハサランコトヲ懼ルト雖 幕僚長各部隊長以下諸官ノ熱誠ニ信倚シー死奉公以テ其ノ重責ニ応ヘ奉ラントス

諸官宜シク現下ノ状勢、北方軍ニ与ヘラレタル任務ニ鑑ミ愈々發奮自励 予ヲ核心トスル鉄石ノ團結ノ下 一意其ノ職責完遂ニ邁進シ以テ此ノ大任ヲ遂行シ誓ツテ聖旨ニ副ヒ奉ランコトヲ期スヘシ」

樋口は、この考えに基づいて、アッツ島は北海支隊でもって占領していたが、これでは少ないと 7,800 人を以て北海守備隊をつくり、アッツだけでなくキスカ、アダックの三島鼎立の形で守るべきと大本營に具申したが認められなかったといい、与えられた兵力の関係でアッツとキスカだけを守ることにしたと、この史料には記されている。それでアッツには山崎大佐が任じられた。山崎は、アッツに航空基地を造ることのほか、アメリカ軍の攻撃に対して海岸線防御をするのか、どちらに主眼を置くか悩んでいるように、樋口には思えた。結果的に言えば、海岸線防御をなにより重視すべきだったと樋口は言い、そのことの誤りが作戦の曖昧さにつながったとの見方がある。

アッツ島へのアメリカ軍の本格的な上陸作戦が始まったのは、5月12日である。山崎から北部軍に、「5月12日未明、米空軍の猛烈なる爆撃開始され、次いで約一師団の地上部隊上陸、アッツ守備隊は既設陣地に抛り、この敵を反撃中」という連絡があった。この上陸作戦は、樋口によれば予想より1カ月早かったという。飛行場はまだ3分の2しか完成していなかったのである。もし飛行機一中隊でもそこに移駐していたならば、その戦闘は多少楽になったと思われるが、そうだとすればアメリカは空母群をもってきたであろうと樋口は言い、「優秀な敵に対する孤島の防禦戦は絶対の困難を伴う」とも述懐している。

樋口は、アメリカ軍の上陸地点に対して「逆上陸」をもって山崎守備隊を救援すべく決意し、旭川師団歩兵団長を長とする混成旅団の即時編成を命じ、自らの決心を大本營陸海軍部に要求したという。これに対して、参謀次長の秦彦三郎が直接札幌に来て、残存海軍の艦艇を見ると、北部軍の作戦指導を行うのは無理とその理由を説明したという。樋口は、「落涙、この断に従う以外になかった」と記している。

実は樋口は、アッツ島にアメリカ軍が上陸したときに、近く混成旅団を救援するから、よろしくアッツ東部の拠点を確保するようにと激励していたというのである。しかし、5月27、28日頃、樋口は、「中央決定の次第、またそれにより私の決心したるアッツ救

援作戦は実行不可能になった。一死困難に殉ぜられたし」と打電したという。山崎からは、「謹んで御意図に基づき行動する」と返電があった。ここに玉砕の方向が明確になったのである。

3 アツ戦、アメリカ軍上陸 19 日目の戦闘

アツ島の戦いは、守備隊からは 5 月 29 日（上陸から 19 日目）に連絡が断たれた。樋口の回想記には、山崎から、「思い残す事はない。使用し得る兵力は百五十名、一団となって、全部隊残らず討ち死する決意である。私共は永遠の生命に安住する。祖国の栄光を祈る。天皇陛下万歳」との最後の通信があったという。

北部方面隊の前衛部隊も連合艦隊の機動部隊もこの方面の作戦を打ち切っている。参謀総長、陸軍大臣は北海守備隊司令官に電報を打っている。そこには次のような表現があった⁴。

「本二十九日貴地区隊ノ奮戦状況更ニ上聞ニ達シ再ヒ優渥ナル 御言葉ヲ賜フ 恐懼感激ニ堪ヘス 今ヤ最後ノ関頭ニ立チ毅然タル決意ト堂々タル部署ノ報ニ接シ合掌シテ感謝ス 直チニ上奏スヘシ 必スヤ諸氏ノ仇ヲ復シ屈敵ニ邁進セン 願クハ意ヲ安ンセラレ永ク北辺ノ守トシテ神鎮リマサンコトヲ」

また、侍従武官であった尾形健一中佐の日記には次のようにあるという⁵。

「守備隊ハ昨夜敵集団ニ突入撃碎シ尽ク自決玉砕セリ 又攻撃発起前通信器暗号ヲ破壊シ傷病者ハ自決セリト 何タル悲愴ゾ 是ダケノ大戦争、二千位ノ犠牲ハ其ノ数ニ於テハ問題ニ非ス当然ナルモ事此ニ至リ何等援助支援救済ノ途ヲ講ズル事能ハズ 而モ最後ノ模様ヲ知ル由モナク又遺骨モ収集スルコト能ハズシテ之ヲ敵手ニ委セザルヲ得ザル実情ハ何トシテモ悲愴ナリ 指揮官トシテ死場所ヲ得タル部下ノ戦死ハ喜ンデ冥スベキモ最後ニハ其骨ヲ拾ッテヤリ度ハ部隊長ノ心情ナリ 此ノ点ハ従来ニ其ノ例ヲ見ズ 『ガ』島ノ撤収又悲愴ナリシモ其骨ハ戦友ニ抱カレテ帰ルコトヲ得タルナリ」

アツ島の日本軍守備部隊は確かによく戦った。兵力や物量は圧倒的に開きがあるのに、その限界まで戦ったことになるが、日本軍に降伏はなかった。アメリカ軍は飛行機で投降を呼びかける多くのビラを撒いていたが、5 月 29 日に山崎は存命の兵士とともに

⁴ 『戦史叢書 北東方面陸軍作戦〈1〉』445 頁。

⁵ 同上。

突撃している。アメリカ軍の史料には、山崎部隊の最後の突撃について、それを目撃した第一線中隊長であった中尉の話が紹介されている⁶。

「一八日間激戦が繰り返され、日本部隊は三〇〇～四〇〇名にへってしまった。・・・自分は自動小銃を小脇にかかえて島の一角に立った。霧がたれこめ一〇〇米以上は見えない。ふと異様な物音がひびく。すわ敵襲撃と思ってすかして見ると三〇〇～四〇〇名が一団となって近づいてくる。先頭に立っているのが山崎部隊長だろう。右手に日本刀、左手に日の丸もっている。・・・どの兵隊もどの兵隊も、ボロボロの服をつけ青ざめた形相をしている。手に銃のないものは短剣を握っている。最後の突撃というのに皆どこかを負傷しているのだろう。足を引きずり、膝をするようにゆっくり近づいて来る。我々アメリカ兵は身の毛をよだてた。わが一弾が命中したのか先頭の部隊長がバツタリ倒れた。しばらくするとむっくり起きあがり、また倒れる。また起きあがり一尺、一寸と、はうように米軍に迫ってくる。また一弾が部隊長の左腕をつらぬいたらしく、左腕はだらりとぶら下がり右手に刀と国旗とをともに握りしめた。こちらは大きな拡声機で“降参せい、降参せい！”と叫んだが日本兵は耳をかそうとはしない。遂にわが砲火が集中された」

こうした玉砕の報は日本国内では戦時美談として、あるいは戦陣訓の範として讃えられた。山崎を称賛する歌も作られ、国民の間に流行することになった。玉砕はこのアッツ島以後、数多く続いていくが、その先駆けとなるこの戦いは、太平洋戦争を戦う<精神力>のテストケースとなったのである。

おわりに

私達は、こうした玉砕や特攻作戦に対して、日本人の精神性を表すものとしての見方をとることがある。あるいは、物量に劣る日本の戦いとみた場合、こうした精神性を対峙させるとの考えもあった。

だがつぶさに見ていくと、こうした玉砕作戦そのもののなかに、やはり大本営参謀たちに欠けていた思想があるのではないかと私は思う。私はひとりの日本人として、こうして戦死した兵士に強い哀悼の念を持っているし、生存者の証言も聞いて、なおのことその思いを持っている。人事不省に陥ってアメリカ軍の捕虜となっていたこの兵士は、生き返ったと知ったときに戦闘のときの記憶がほとんどないことに気づいたという。

⁶ 『戦史叢書 北東方面陸軍作戦〈1〉』453-454頁。

玉砕をどう捉えるかは、今戦史を研究するときの鍵になるのではないかと思う。このアッツ島玉砕のあと、キスカ撤退が行われるが、キスカ撤退の兵士達は今なお、この玉砕で戦死した兵士だけが我々を救ってくれたとの言を涙でくり返している。このことも、私は改めて記しておきたいと思う。

